

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520800

研究課題名(和文) 13～4世紀の雲南地方における民族形成と民族間関係

研究課題名(英文) Ethnic Formation and Interaction in the Thirteenth and Fourteenth Century Yunnan

研究代表者

林 謙一郎 (HAYASHI, Kenichiro)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20294358

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：モンゴル政権時代の雲南地方における各民族の呼称・分布状況について分析を行い、現代雲南の二大主要民族である白族・彝族の先民について、その分布の概要を文献史料の分析を通じて明らかにするとともに、特にそのうち白族の先民とされる「白人」については、13世紀半ばには雲南西西部・中部を含むかなり広い範囲に分布し、それが南詔国後期・大理国時代の周辺地区統治体制と大きな相関関係を持つことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The study performs analysis for appellation and distribution of ethnic groups in Yunnan provinces in Mongolia regime, especially for the ancestors of present Bai Nationality and the Yi Nationality. For the Bai Ren, that is the ancestor of present Bai Nationality, it pointed out that they lived in the wide area including present Southwest and Central Yunnan in the middle of the thirteenth century, and that this distribution has a close relationship with the administrative system to the peripheral district in the latter part of the Nanzhao Kingdom and the Dali Kingdom.

研究分野：中国民族史

キーワード：民族形成 民族関係 民族分布 雲南白族

1. 研究開始当初の背景

13-4世紀の、いわゆるモンゴル政権時代は、中国南部、特に雲南地方を含む中国西南部における非漢民族の呼称・分布などの基礎が形成された重要な時期である。古来中国南部には非常に多種・多数の非漢民族が居住しており、時代と共に南進してくる中国文化の影響を強く受けながらも、しばしば中央王朝に対抗する政治権力を発生させ、独自の文化圏を形成してきた。

これらの非漢民族に関する記述は歴代の正史を代表とする文献史料に記載されているが、中国前近代の歴史記述の特徴として、前代の記述を踏襲、加筆されたものが累積しており、唐宋時代に編纂された『通典』辺防典・南蛮、『新唐書』南蛮伝などにその到達点を見ることができる。ところが北宋、南宋の両代、中央王朝は中国西南部の非漢民族との積極的な交渉を避けたため、この地方に関する記述は唐代までのものを形式的に引き継ぐ以外は、中央王朝が具体的な対処の必要に迫られた事件に関する、ごく断片的な史料が残されるにとどまる。すなわち、中国西南部の非漢民族に対する継続的・体系的な記述の伝統は宋代の時点でいったん失われたといっても過言ではない。

これに対し、モンゴル政権時代(本研究では大理国がモンゴルに降服してから、明軍が雲南を制圧するまでの時期を指す。中国本土・モンゴル高原における「モンゴル時代」とは必ずしも一致しない)の史料記述は、良くも悪くもそれまでの伝統を打破するものであった。この時代の雲南地方に関する史料は決して豊富であるとはいえないが、『元史』地理志のほか、『元一統志』・『混一方輿勝覧』などの地理書の雲南行省部分が残存している。これらの地理書は、故方国瑜教授によると大理国からモンゴル王朝に献上された『大理図志』(仮称)にもとづくものであり(方国瑜『中国西南歴史地理考釋』)、各府・州・県の沿革には他の中国史書では得られない、唐宋時代の統治機構との連続性が明記されている。その一方で、各地に居住する非漢民族の分布などの状況に関しては、もっぱら現状主義が取られており、この時期に初めて文献に出現する民族名称がきわめて多い。唐宋時期及びそれ以前の民族名称との関連が示されている場合もあるが、概して住地などにもとづくかなり安易な結びつけがなされており、これは『元史』などの編纂時の問題であるとともに、上に述べたように宋代において西南非漢民族に関する体系的な知識が失われたこととも無関係ではない。

そして明代以降の地理書、地方志などにおける非漢民族、特にその沿革に関する記載の大部分は、実はこのようなモンゴル政権時代に作られた記述をそのまま踏襲しているにすぎない。それ以前の史書を参照するケースもあるが、多くは潤色の域を出ない。これに

ついては申請者のおこなった平成21-23年度基盤研究(C)「中国雲南地方の非漢民族における「歴史記述」の伝統」でも明らかにしたところである。

冒頭に述べた中国西南部の非漢民族研究におけるモンゴル政権時代の重要性とは、一面ではこのような史料状況を反映しているに過ぎず、真の意味でこの時代が西南民族の呼称・分布に関する画期とみなしてよいかの検討は、実は十分になされているとはいえない。本研究では、申請者がこれまでにおこなった南詔・大理国に関する研究、および前回の基盤研究においておこなった明代地方志の研究の両者を基礎として、白族・彝族を具体的な分析対象としながら、西南非漢民族の民族形成、呼称および分布の状況についてモンゴル政権時代がいかなる意義を持つものであるかを再考しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、中国南部の非漢民族の呼称・分布などの基礎が形成された13-4世紀における、特に雲南地方における民族形成・民族間関係、および中央王朝のこれに対する干渉などの問題について、総合的な分析・考察を加えることを目的とする。その際特に、現代雲南の二大少数民族である彝族・白族の動向を分析の主眼とする。この二民族は単に現代雲南の人口中に占める割合が少数民族中1位・2位を占めるというだけではなく、13世紀以降の雲南地方の歴史・社会・文化の形成に大きな役割を果たし、中央王朝とも積極的にかかわりを持ってきた民族だからである。また同時に、この両者ともモンゴル政権時代の史料に初めてその呼称が記載される民族でもあり、それ以前の民族集団としてのあり方が日中を含む学界で議論となっている。

本研究では(1)白族の形成について、モンゴル政権時代の史料をあらためて精査することによって裏付けをおこない、(2)あわせて南詔・大理国のいまひとつの主要民族であると言われる(申請者の見解では白族と同様、南詔・大理国を経験することによって生まれた民族である)彝族の形成過程について考察する。そして(3)この2民族にとってモンゴル政権時代の持つ意味を考察することから、雲南および中国西南の非漢民族全般にとって、同政権時代の持つ意義を考察する手がかりを得ることを目標とする。

西南非漢民族に関する史料の記載内容・スタイルがモンゴル政権時代を境として大きく変化するという問題自体は、けっしてこれまで知られていなかったわけではない。にもかかわらず従来、いかにしてそれ以前と以後の史料記載を統合的に解釈するかという問題については十分な検討がおこなわれてこなかった。それは、唐宋時代の中国西南が南詔・大理国およびチベットの吐蕃といった中央王朝とは独立した政権の時代であり、いっ

ぼう元代に雲南行省が設置されて以後、明清時代の中国西南は土司制度等、あくまで中央王朝の辺境統治政策という文脈から扱われることが当然であり、両者にまたがる視座を備えた研究がほとんど見られなかったからにはほかならない。これは日本における研究に限らず、中国においても、雲南民族史に関する通史的な著作は少なからず存在するが、その多くは断代史・族別史の集積であり、そこに本研究の問題とする時代の意義を明確にする視点は見出し難い。

研究代表者ははじめ南詔・大理国の形成・発展とその周辺世界との関係を主軸に研究をおこなったが、雲南大学留学後はこれを現在南詔・大理国の古都に主に分布する白族の形成史に読み替える作業をおこない、それによって同大学の博士学位を取得するとともに、中国民族史という学科の研究スタイルについて学んだ。それは「中国」民族史という以上、現代の「統一的多民族国家」に合流する範囲の研究というのが大前提はあるものの、それでもなお申請者がそれ以前におこなってきた中国周辺国家研究とも、また中央王朝の辺境統治政策研究とも異なる、非漢民族本位の研究手法である。ひるがえって近年の日本における中国西南に対する研究を見ると、明清時代の研究と中心として数の上ではかなりの増加を見ているが、その多くは依然として中央王朝の辺境統治政策研究の範囲を出ていない。本研究がモンゴル政権時代「以前」と「以後」の西南民族の歴史的状況を包括的に理解する視野を提示することによって、日本における西南民族研究が新たな段階に進むための手がかりの一つとなることを期待する。

3. 研究の方法

本研究は、基本的には文献史料にもとづく研究である。具体的な方法としては(1)13-4世紀の関連文献を網羅的に収集する(2)一次史料中の白族・彝族に関する記載を精査・抽出する(3)同時期における白族・彝族の状況、民族間関係について考察するという手順をとる。

まずは当該時期に関する文献を網羅的に収集する必要があった。ここで言う文献には、(a)モンゴル政権時代及び明代に編纂された史書・地理書

(b)1970年代以降、雲南省大理州で発見された碑刻

(c)同時期に関する中国人研究者(特に雲南省の研究者)の研究論文・著作

などを含む。このうち(a)(b)については活字本、影印本で入手可能なものの多くは研究開始時点ですでに手許にあった。碑刻文についても主要なものは『大理叢書・金石篇』『中国西南地区歴代石刻匯編』などに収録されている。しかしこれらのうち重要性の高いものについては現物を確認する必要がある

ことは言うまでもない。そこで初年度の9月10月に中国雲南省に出張し、雲南大学歴史系を拠点として資料収集及現地の研究者都の交流を行った。また9月末に雲南省昆明市・景東県において開催された国際学会に参加し、本研究の一部をなすモンゴル政権時代の雲南行省において大理総管となった段氏(白族)の位置づけに関する研究発表を行った。ただし、当該年度の8月10月頃は中国における反日運動が特に高潮をみせた時期と重なっており、訪問先の中国人研究者からも学会への参加はともかく、単独で行動することは控えてほしいとの要請を受けたため、大理市を訪問して碑刻文を実地調査するなどの活動は果たすことができなかった。これと並行して文献資料、とくに『元史』地理志雲南行省および『雲南志略』雲南総叙、白人條・嘉靖『大理府志』沿革史証などの史書について検討を行い、モンゴル時代の雲南民族の分布状況について分析を行ったが、その過程で、同時代に先立つ南詔・大理政権の雲南統治および、それに伴って特に大理国時代に行われた段氏・高氏など大理地区の(白族)大姓の周辺各地への移民活動が、特に白族(の先民であるモンゴル時代の「白人」)の分布に大きな影響を与えていることが改めて確認された。結果的にはこの分析から得た知見が研究成果の主要部分を占めることになった。

第2年度に雲南省を訪問した際には、雲南東部の曲靖市において大理国時代の碑刻文に関する調査を行うとともに、昆明市において中国研究者と学術交流・議論を行う機会を持った。第3年度には広西壮族自治区で国際学会に参加するとともに、広西民族大学・広西師範大学の研究者と交流・議論をおこなった。また、研究分担者として参加している基盤研究(A)「山から見たベトナム史」(研究代表者:松尾 信之)のプロジェクト調査として2013年12月~14年1月にベトナム北部国境から雲南東南部、2014年12月~15年1月にベトナム東北部国境から広西西南部を踏査した際にも、紅河学院・広西民族大学の研究者と交流を行い重要な知見を得た。特に2015年1月に広西百色市田東県の横山寨遺跡を訪問する機会を得たことは、本研究及び、研究代表者の今後の研究にとって大きな意味を持つものであった。

4. 研究成果

本研究で明らかにできた内容は以下のとおりである:モンゴル政権時代の雲南地方に関する文献史料に記載される各民族の呼称・分布状況について分析を行った結果、まず現代白族の先民とされる[棘ノ人]人(以下「白人」と記す)については、13世紀半ばには雲南南西部・中部を含むかなり広い範囲に分布し、現代白族の分布範囲を大きく超えているが、同時に現代の大理地区が「白人」文

化の中心として強く意識されていることが証された。これは報告者が従来から主張している、白族は南詔国後期(9世紀)に大理地区においてその核心が形成され、大理国時代(10-13世紀前半)を通じて雲南各地へ拡散したという仮説に符合するものである。

いっぽう、現代彝族の先民に関しては、雲南東北・貴州に存在した烏撒烏蒙宣慰司・羅羅斯宣慰司については多く言及されるものの、雲南中部・西部(現在の昆明市・楚雄州・大理州)にかんしては言及が少なく、これらの地域に現在分布している彝族の各支系の形成・分布の時期が前述の白族先民に比較してかなり遅いことが明らかになった。これは、古来雲南中部以北の二大民族(群)をなしていたと見なされる白族・彝族のそれぞれの先民に関して、その現在にいたる分布状況が形成された時期にかなりの時間差があることを指摘するものであり、この両民族(群)が主要な役割を果たした南詔・大理国の民族系統問題にも影響を与えるものである。

以上の内容のうち、特に白族の分布と、南詔国後期～大理国時代の周辺地区統治体制との関係については、雲南大学歴史系の研究者との討論を経て、同大学において編集・出版された論文集に所論を発表することができた。同書は中国における西南民族史学・歴史地理学・文献学の開祖である故方国瑜教授の生誕110周年を記念する論文集であるが、本論文は現在中国史研究において内外で広く利用されている『中国歴史地図集』に反映されている方国瑜教授の学説に修正を迫るものであり、雲南史学界において高い評価を得た。

また、最終年度の8月～9月には広西壮族自治区において開催された国際学会(主催組織は初年度に参加した学会と同じ)に再度参加し、大理国の雲南東部から広西・貴州における活動と白族先民の同地区における分布の状況との関連性、さらにはそれが当時の中原王朝との関係に与えた影響に関する問題について発表を行った。ただし、これは本研究の課題から直接導き出される問題関心ではあるものの、広西・貴州地域に関する文献調査は本研究の当初の調査対象に含まれておらず、ために網羅的な調査を行う段階には達しなかったため、現段階では論文の形で発表するには至っていない。

さらに、本研究においてモンゴル政権時代の大理段氏に関する検討を進める中で得られた成果のひとつに、明清時代に中国西南辺境地域で広く行われた土司・土官制度の源流に関する所見がある。土司・土官制度については、一般に秦漢以来歴代の中央王朝が実施してきた「羈縻」統治の発展形であると捉えるのが一般的な見方であるが、今回分析した段氏は、一方では「大理金齒等処宣慰使都元帥」という後世の土司に典型的な肩書きを世襲的に保有しながらも、他方では大理路総管、雲南行省參知政事、同平章政事などの官職を、

各代の能力や実績に応じて与えられている。さらに、当時の雲南にはモンゴル諸王(クビライの子孫を代表とする封建領主)および行省を頂点とする官僚組織(雲南行省の初代長官は色目人の賽典赤である)が同時に存在しており、これらとの関係や、大理地区の行政的・戦略的重要性を考慮すれば、段氏の大理統治はモンゴル政権による征服地域統治の一形態であると見なすことができる。したがって、もしも段氏のあり方が明代以後の土司・土官制度の原初形態と見なすことができるのであれば、これらの制度の起源について、「羈縻」との類似性を指摘するだけでなく、時代的にも直結するモンゴル政権の中国統治の一形態が辺境地区において残存したものであるとの方向から新しい検討を行うことができる可能性がある。この点もまた、今後さらに検討・分析を進めていくに値する課題のひとつであるといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

林 謙一郎、「有関南詔、大理国政区建置的幾箇問題」林超民(編)『方国瑜誕辰110周年紀念文集』雲南大学出版社、2013年、pp.302-311

〔学会発表〕(計 3件)

林 謙一郎、「大理“総管”段氏の地位と元代土司(土官)制度的運用」第二屆土司制度与边疆社会国際学術研討会、2012年9月30日中国雲南省昆明市、雲南師範大学

林 謙一郎、「モンゴル時代の雲南 大理段氏の位置づけをめぐって」広島史学研究会2012年度大会、2012年10月28日、広島大学大学院文学研究科

林 謙一郎、「重新探討大理国与宋朝之間的关系」第四届中国土司制度与土司文化国際学術研討会、2014年8月21日、中国広西壮族自治区来賓市・忻城県(県委1号会議室)

〔図書〕(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 謙一郎 (HAYASHI KENICHIRO)
名古屋大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20294358

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし